

〈論文〉

UR 賃貸住宅における生活支援アドバイザーの 地域コミュニティ形成のためのイベント企画に関する研究

大塚 順子

Abstract

【目的】本研究では、UR 賃貸住宅に配置された生活支援アドバイザーの業務のうち、イベントの企画、実施などの地域コミュニティ形成業務に着目した。イベントの開催状況や特徴を明らかにするとともに、コロナ禍での具体的な工夫点を考察し、今後の地域コミュニティ形成業務の知見を得ることを目的とする。【研究方法と研究対象】研究方法は、生活支援アドバイザーへのアンケート調査、ヒアリング調査および、団地環境に関する情報収集調査を実施した。【結果と考察】生活支援アドバイザーが企画、実施するイベント内容は、「ものづくり」「音楽・鑑賞」等で、不定期に開催されるものが多かった。イベントは、高齢者のみを対象としていたが、多世代に拡大されたことを受けて、複数のテーマを組み合わせたイベントが増加傾向であった。現状では、高齢者対象のイベントが多いものの、今後、多世代の参加を促すためには、開催日時や内容、テーマの選定や告知方法の工夫が必要であることがわかった。さらに、感染リスクへ配慮したイベント企画では、新たに、複数の開催方法が工夫されており、今後の展開が期待される。

Keywords : 高齢者、生活支援アドバイザー、UR 賃貸住宅、コミュニティ形成、屋外環境

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

日本では、戦後の住宅難に対応するため、早急に大量の住宅を供給するための政策が進められてきた。中でも、UR 都市機構（以下、UR）では、1950 年代の高度経済成長期から継続して、公的住宅の供給とまちづくりを支援する様々な取り組みをしてきている。令和 2 年 UR 住宅居住者定期調査結果によると UR 賃貸住宅に居住する 65 歳以上の高齢人口は 36.9%で、少子高齢化の進行に伴って、特に都市部を中心として大規模な住宅供給が行われてきた経緯から、これまでに供給された UR 団地が立地する地域の高齢化率は、全国平均を大幅に上回り、今後も、さらに進行していくと見込まれている。そのため、高齢化への対策として、UR では、住戸や団地敷地のバリアフリー化を積極的に進めるとともに、各団地に管理サービス事務所を設置し、ゆあ～メイトと管理主任^{注1)}を配置している。さらに、単身高齢者の増加など、都市部の高齢化を先駆けて迎えている団地特性を考慮して、高齢者の見守りと生活支援など、高齢者が安心して暮らし続けることをサポートする役割の必要性が高まったことから、2008 年から一部の団地に生活支援アドバイザー（以下、アドバイザーまたは AD）を配置している。アドバイザーの採用にあたっては、資格要件は特になく、ゆあメイトからの転職者が約 1/3 で、団地状況を良く把握している人材が多い。

また、各自が熱心に情報収集しており、アドバイザー業務に就任してから、福祉住環境コーディネーターの検定試験に合格している人が約半数いる。また、業務受託会社による全体研修会が年に数回実施されている¹⁾。

筆者らは、アドバイザーの配置当初から、業務の現状把握と業務上の課題に関する調査研究を継続して実施し、居住者の生活ニーズに気づき、必要に応じて専門機関につなぐ対応を担う人材として今後、その役割がますます期待されている状況を把握してきた^{1) 2)}。特に、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って、これまでの生活状況が大きく変化した高齢者を見守り、支援する状況について『UR 賃貸住宅における生活支援アドバイザー業務に関する研究—コロナ禍における高齢者対応と見守りの工夫について—』東京通信大学紀要第5号(以下、既報)にて、取り上げた³⁾。本研究では、既報の結果を受けて、コロナ禍で行動制限や自粛生活が長期化する中で、アドバイザーが行った業務上の工夫や課題について着目する。特に、居住する高齢者の健康増進と地域コミュニティ形成をサポートするための業務に焦点を当てる。地域コミュニティ形成業務としては、高齢者、若者世帯、子育て世帯など多様な世代を対象として、イベントの企画、開催を年3回以上実施することとなっていることから、これまでの具体的な取り組みを確認するとともにコロナ禍での影響や変化した状況を明らかにし、今後のアドバイザー業務の一助となる知見を得ることを目的とする。アドバイザーの地域コミュニティ形成業務は、URの地域医療福祉拠点化^{註2)}の取り組みにおける多世代共生への働きかけや医療や介護サービスを周辺地域へも提供する体制を目指す重要な取り組みである。なお、本研究は、『UR 賃貸住宅における生活支援アドバイザーの地域コミュニティ形成業務に関する研究』日本家政学会第75回大会で口頭発表⁴⁾した内容にさらなる分析を加えてまとめたものである。

1.2. 既往研究と本研究の位置づけ

団地居住者のコミュニティ形成や高齢者の交流、地域活動に関する研究は、これまで幅広く取り組まれてきている^{5) 6)}。筆者らがこれまで取り組んできた研究⁷⁾においても、集合住宅の集会室を利用したイベント実施について取り上げてきた。高齢者を対象とするイベントでは、参加者が固定化し、新規参加者が少ないことや、イベント企画、実施の中心人物が高齢などの理由で抜けてしまうと継続が難しいことなどを明らかとしてきた。また、これまで、会場の広さや管理の問題から対象者を限定した開催が多く、広く多世代に対応した企画が少ないことも指摘されている⁸⁾。既報³⁾では、イベントが、居住者にとって楽しみや外出のきっかけにもなっている状況が確認でき、コロナ禍でイベントの延期や中止を余儀なくされていたものの、感染リスクをできる限り避けた団地屋外環境を利用した体操やウォーキング、クイズラリーなどのイベントが行われ始める傾向が特徴的であった。団地の屋外の共用空間に関する既往研究では、ベンチ設置による住民の居場所形成に関する李らの研究⁹⁾や団地居住者が共同花壇を運営することでコミュニティ創出や育成につながるという水野の研究¹⁰⁾などが散見されるものの、居住者の見守りやイベント活動等に関連させた研究は見られない。そこで、本研究では、アドバイザーが行う高齢者の健康増進や地域コミュニティ形成をサポートする業務の実態を明らかにし、コロナ禍での行動制限がある中で、地域コミュニティ形成をサポートする関わり方の工夫について、団地環境に着目して分析し、今後のアドバイザー業務に資するものとする。

2. 調査概要

本研究では、既報³⁾で実施した3種類の調査のうち、イベント企画、実施に関連した調査結果を抽出して、分析を行った。具体的な項目は、以下の3点である。

調査1：アンケート調査では、アンケート項目③イベント実施業務に関する質問と過去4年間のイベント記録表の作成を依頼し回答を得た（回収率97.3%）。そのうち、イベント内容についても詳細に記載されていた117団地81人の回答について、さらなる分析を行った。なお、アドバイザーが実施するイベント内容や実施方法については、調査1と同じ形式で2015年に実施したアンケート調査結果^{注3)}を用いて、その変化を見るための比較分析を行った。調査1（2020年調査）および2015年調査の概要を表1に示す。

調査2：ヒアリング調査でも、イベント企画・実施に関する質問と団地環境を利用した業務の工夫などについて質問し、33団地33人から回答を得た。

調査3：団地内環境及び配布物・掲示物に関する調査では、調査2：ヒアリング調査でコロナ禍での特徴的な工夫が抽出されたアドバイザーを中心に団地居住者が良く滞留している場所、施設、広場、公園等、アドバイザー業務として見守り等の情報収集の際に、ポイントとしている団地内の特徴的な場所についても記入して回答を得た。なお、団地環境に関する自由記述は、KH Coder3を用いて、共起ネットワーク分析^{注4)}を行った。調査2、3の概要を表2に示す。

表1 調査概要（調査1：2020年調査、2015年調査）

	調査1：2020年調査（アンケート調査）			2015年調査（アンケート調査）注1		
対象	UR賃貸住宅のうち、生活支援アドバイザーを配置している団地で、JSおよびURCが管理業務を受託している153団地116人の生活支援アドバイザー			UR賃貸住宅のうち、生活支援アドバイザーを配置している団地で、JSが管理業務を受託している33団地30人の生活支援アドバイザー		
調査方法	JSおよびURCの本社および支店を通して、趣旨説明などを行った後、調査員より各アドバイザーへメールにて回答方法等を知らせ、実施した。アンケート調査は、4分野にあらかじめ分けて設定し、すべて、webからの回答とした。			JSの本社および支店を通して、趣旨説明などを行った後、アンケート調査用紙を配布し、回収した。		
調査期間	2020年7月～2020年8月			2015年8月～9月		
調査員	日本女子大学 家政学部 住居学科 定行研究室					
回収・実施状況	153団地116人の生活支援アドバイザーのうち、調査への協力可能であった151団地113人に対して実施、149団地111人より回答を得た（全体回収率：98.2%）			33団地30人の生活支援アドバイザーに配布し、すべて回収（回収率：100%）		
	アンケート項目	質問番号	回答率	アンケート項目	質問番号	回答率
	①生活支援アドバイザーの基本状況・基本業務について	問1～39	97.3%	①生活支援アドバイザーの基本状況・基本業務について	問1～14 問41～75	100%
	②高齢者の安否の確認や見守り業務について	問40～74	97.3%	②高齢者の安否の確認や見守り業務について	問15～36	
	③イベント実施業務について	問75～83	97.3%	③イベント実施業務について	問37～40	
*過去4年間のイベント記録表の作成 対象：2016～2019年間のイベント		90.7%	*過去4年間のイベント記録表の作成 対象：2013～2015年間のイベント			
イベント関係回答）アンケート調査は、117団地81人、イベント記録の回答は81団地より回答を得、詳細把握できたイベントは668イベント*1			イベント関係回答）アンケート調査は、33団地30人、イベント記録の回答は27団地より回答を得、詳細把握できたイベントは179イベント（イベント数は197）*1			
④コロナ禍での業務について	問84～85	94.7%	*JS:日本総合住生活株式会社 URC:株式会社URコミュニティ			

*1：複数団地を1人のADが担当する場合、複数のADが1つの団地を担当する場合については、イベント内容が同じであるため、1団地1アドバイザーとしてカウントした。また、開催イベントは、開催した回数をもとに延べ数でカウントした。

表2 調査概要 (調査2、調査3)

調査2：ヒアリング調査	
対象	アンケート調査を実施した153団地113人のうち、大規模団地などの特徴を持つ35団地*の生活支援アドバイザー35人
調査方法	J SおよびU R Cの本社および支店を通して、趣旨説明などを行った後、ZoomまたはTeams を利用してオンライン双方向型で調査員が質問し聞き取る形で実施した。
調査期間	2020年9月～2020年12月
回収・実施状況	35団地35人のうち、33団地33人に実施（実施率：94.28%）
調査3：団地内環境及び配布物・掲示物に関する調査	
対象	ヒアリング調査を実施した33団地33人の生活支援アドバイザー
調査方法	ヒアリング調査時に、趣旨説明を行ったうえで、各団地の住棟配置図を用意して郵送にて配布、回収した。
調査期間	2020年12月～2021年1月
回収・実施状況	①配布物・掲示物：33団地33人のうち29団地29人より回収（回収率：87.9%） ②団地内環境に関する記入：33団地33人のうち28団地28人より回収（回収率：84.8%）
主な調査内容	①主に2019年～2020年12月までの間に、新型コロナウイルス感染症対策や自粛期間中の過ごし方などに関して掲示または配布した掲示物、配布物等の原本、または控えを収集した。 ②勤務する団地の住棟配置図に、団地居住者（主に高齢者）が集まりやすい場所、施設、広場、公園、スペースや、団地の特徴となる魅力的な環境など、見守り業務に関連する場所について記入してもらい、回答を得た。

* ヒアリング対象団地の選定については、アドバイザー配置開始当初に、実態把握のために実施した『UR賃貸住宅における生活支援アドバイザーの窓口業務のあり方に関する調査結果について（調査研究 I）』2016年における調査で対象とした団地を基本とした。

* JS：日本総合住生活株式会社 URC：株式会社 URコミュニティ

3. 調査結果

3.1.1. イベント開催業務

アドバイザーの業務には、「高齢者・若者世帯・子育て世帯を含むコミュニティサポート等」があり、具体的には、各種イベントの企画、開催を年3回以上実施することとなっている。そのため、調査1では、2016～2019年の間のアドバイザー業務で実施したイベントや集会を対象とした。複数年にまたがるため、この期間にアドバイザーが交代した団地については、調査時点で勤務しているアドバイザーの手元にある記録、および把握している範囲でのイベント等について回答を得た。また、2020年調査では、新型コロナウイルス感染症の拡大により、緊急事態宣言が発出された地域もあり、イベントの企画、実施が大きく制限された状況がある。具体的なイベント内容について、過去に遡って回答を得たが、実際に記入協力が得られた117団地、81人のアドバイザーのイベント内容、実施状況について分析した。また、2018年より、アドバイザーの業務ハンドブックが改定され、高齢者だけでなく、若者世帯や子育て世代も含めた多世代を対象として地域コミュニティ形成のサポートとしてイベントを実施することとなった。それを踏まえ、2015年調査の結果と比較を行い、変化状況を確認した。2015年調査では、調査当時、アドバイザーが配置されていた団地のうち、調査可能だった33団地30人^{注5)}を対象として2013～2015年の間のアドバイザー業務で実施したイベントや集会について把握した。

3.1.2. イベントの企画方法と内容

イベントの企画の仕方について見ると、2015年調査では、「定期的に企画」を行っているのが9人（30.0%）、「不定期で企画」をしているのが16人（53.3%）で、「定期的に企画」と「不定期で企画」の両方を企画している団地が5人（16.7%）で、すべてのアドバイザーが企画をしていた。2020年調査では、「定期的に企画」のみを行っているとは回答

したアドバイザーが31人(29.8%)で、「不定期で企画」のみの実施は、49人(47.1%)であった。「定期的に企画」と「不定期で企画」は、10人(9.6%)、さらに、「定期的に企画」と「不定期で企画」に加えて「希望があった時に実施」もあるアドバイザーは1人(0.96%)であった。全体としては、「不定期で企画」をしているアドバイザーが多い結果であり、2015年調査と同じ傾向であった。2020年調査では、「企画はしていない」と回答したアドバイザーが、11人(10.6%)いたが、これは、調査時点で就任したばかりで、まだ実施したことがないケース、コロナ禍での自粛などが要因であった。(図1)。

イベントの企画、実施については、2015年調査では、33団地、のべ197イベントが確認でき、企画の仕方に関係なく、企画数だけを比較すると団地ごとの差が大きいことが確認できた。最もイベントが多い団地では21イベント実施しているのに対し、少ない団地では1イベントのみであった。一方、2020年調査では、回答が得られたのは117団地、81人のアドバイザーであった。アドバイザー1人あるいは、2人で複数の団地を担当している場合、または、複数のアドバイザーで1団地を担当している場合については、イベント内容が共通のため、いずれも1団地としてカウントした。2015年調査時と同様に、企画数の比較を行うと、最も多い団地では、28イベント実施し、最も少ない団地では、1イベントであり、こちらも団地ごとの差が非常に大きいことが確認できた。イベントの企画が少ない状況については、アドバイザーの就任時期などにも関連していることがヒアリング調査等で確認できた。

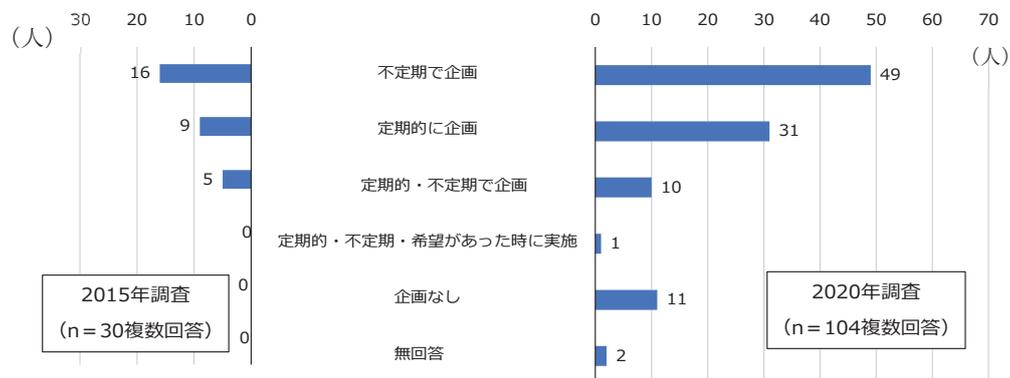


図1 イベント企画の仕方

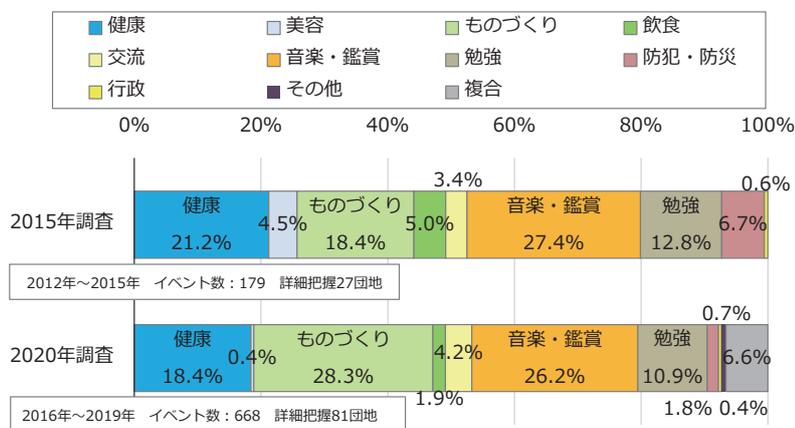


図2 イベント内容の分類

表3 イベント内容の分類項目

分類 番号	2015年調査	2020年調査
	27団地 179イベント	117団地 668イベント
1	健康	健康
2	美容	美容
3	ものづくり	ものづくり
4	飲食	飲食
5	交流	交流
6	音楽・鑑賞	音楽・鑑賞
7	勉強	勉強
8	防犯・防災	防犯・防災
9	行政	行政
10		複合
11		その他

実際のイベント内容の詳細について分類したものを図2に示す。2015年調査結果として、27団地179イベントの結果を分類した際、その内容によって、1.健康、2.美容、3.ものづくり、4.飲食、5.交流、6.音楽・鑑賞、7.勉強、8.防犯・防災、9.行政、の9つに分類することができた。イベント内容の変化状況などを把握するため、原則的に、同じ項目での分類を試みたが、2020年調査では、複数の内容で企画されたイベントが多くなっており、それについては、別途10.複合として分類した(表3)。結果として、2020年調査で最も多かったのは、「ものづくり」で189イベント(28.3%)、ついで「音楽・鑑賞」で175イベント(26.2%)であった。さらに、「健康」に関する内容が123イベント(18.4%)と多く、「勉強」が73イベント(10.9%)となっていた。2015年調査時とでは、対象団地数もアドバイザー数も違うことから、単純な比較はできないものの、各調査時のイベント総数に占める分類項目ごとの割合を見ると、2015年調査では「音楽・鑑賞」19イベント(27.4%)が最も多く、ついで「健康」に関する内容が38イベント(21.2%)、「ものづくり」が33イベント(18.4%)と続いており、わずかな違いではあるが、「ものづくり」「健康」「音楽・鑑賞」に関するイベントが多い傾向が確認できた。変化としては、2015年調査に、8イベント(4.5%)あった、「美容」に関するイベント、12イベント(6.7%)あった「防災・防犯」に関するイベントが減り、2020年調査では、コンサートの後に健康に関する勉強会、情報提供をするイベントや、体操をしながら情報提供するなど、2つの内容を組み合わせた複合型のイベントが多くなっている傾向が見られた。2015年調査時にも、お茶とお菓子を提供するイベントはあったものの、メインになるイベントが比較的是っきりしていたものが多い傾向があったが、2020年調査時は、いくつかの要素を組み合わせることで、多世代が参加しやすい様に、集客の工夫がされていると推察される。

次に、2020年調査のイベント内容の詳細をみると(図3)、「ものづくり」の項目で、「フラワーアレンジメント」が、91イベントと、群を抜いて多いことが確認できた。このイベントは、関東圏の団地のものは、いずれも同じ講師によるもので、新鮮で質のよい生花を利用し、講師の楽しいお話もあり、どの団地でも大人気のイベントであることがヒアリング調査で確認できた。この「フラワーアレンジメント」とは、同じ講師によるイベン

トとして 2015 年調査時にも開催されていたが、どの団地でも好評であるために、他団地でも実施されるように広がり、年に 1 回ないしは 2 回実施している団地が多かった。お正月やクリスマスなど、季節感を考慮した企画にするケースが多く、イベントとしての定着率が非常に高いことが分かった。その他の「ものづくり」については、「寄せ植え教室」「季節の花を楽しむ」「フラワーケーキづくり」「ハーバリウムづくり」「苔玉づくり」など、植物や花を素材したものが多かった。その他、数として多くはないものの、「手芸」「パステースづくり」「陶芸」「絵手紙」「折り紙」など、多様なものづくりをするイベントが考えられている様子が把握できた。また、「パステース」づくりなどは、カードを利用しやすい様に、また、紛失を防ぐリード付きのものを作成してみるなど、高齢者の生活に必要性が高く、関心も高いものとして企画され、多世代のニーズにも対応するものとして題材を選んでいることが確認できた。

さらに、開催が多いイベント内容としては、「体操」や「運動」など、健康づくりに関するもので、その地域のご当地体操や座ってできる体操など高齢者が参加しやすい内容のものが多い傾向がみられた。「健康」に関するイベントは、体を実際に使って、フレイル予防や日常の体力維持の目的のイベントも多いが、「健康づくりに関する講話」「口腔ケアの話」など、講義系のイベントも多く、高齢者の健康に関する関心が高いことがうかがえた。イベント開催数が多かった内容としては、「音楽・鑑賞」に関する項目では、複数のイベントが行われていた。特にハープ、バイオリンなどの楽器をつかった演奏会やコンサートは、好まれる傾向がみられた(図 3)。さらに、ヒアリング調査から、「童謡を歌う」「歌謡ショー」など、知っている名曲と一緒に歌うなどの参加型の企画も好評であった。「勉強」などの項目では、「終活セミナー」「お墓情報」などの情報提供や相談会、「高齢期の健康」に関する各種セミナーなどもあげられた。

2015 年および 2020 年調査と両方で回答をえられた団地のうち、2015 年より継続して開催しているイベントは、56 イベント(イベント全体の 8.4%)とわずかであった。継続しているイベントの分類項目では、「ものづくり」が 32 イベント、「音楽・鑑賞」が 14 イベントで多くなっていた。「ものづくり」では、最もイベント数が多い「フラワーアレンジメント」が 30 イベントを占めていた。その他、継続されていた「折り紙教室」、「味噌づくり」、「音楽・鑑賞」では、「寄席・落語」が 6 イベント、「ハワイアンバンド演奏会」、「懐かしい童謡を歌いましょう！」など、「健康」では、「いきいき健康教室」や、「ラジオ体操」などがあげられた。さらに、「出張相談会のイベント」では、地域包括支援センターとの連携による「行政」関係の相談会が継続実施されていた。数は少ないが継続実施されているイベントは、2 回にわたる調査時に同一のアドバイザーが勤務しており、企画して好評だったイベントを引き続き実施しているものがほとんどで、参加者の確保とイベント内容に一定の評価があるものと考えられる。

3.1.3. イベント企画と対象設定

2015 年調査で確認できたイベントは、高齢者のみを対象として実施されているが、対象が多世代に変更されたことを受けて、2020 年調査では、多世代対象のイベントも企画されていた。実際に開催されたイベントは、定期的開催、不定期での開催の両方を合わせると 668 イベントで、定期的開催イベントは、合計 153 イベントあった。そのうち、高齢者の

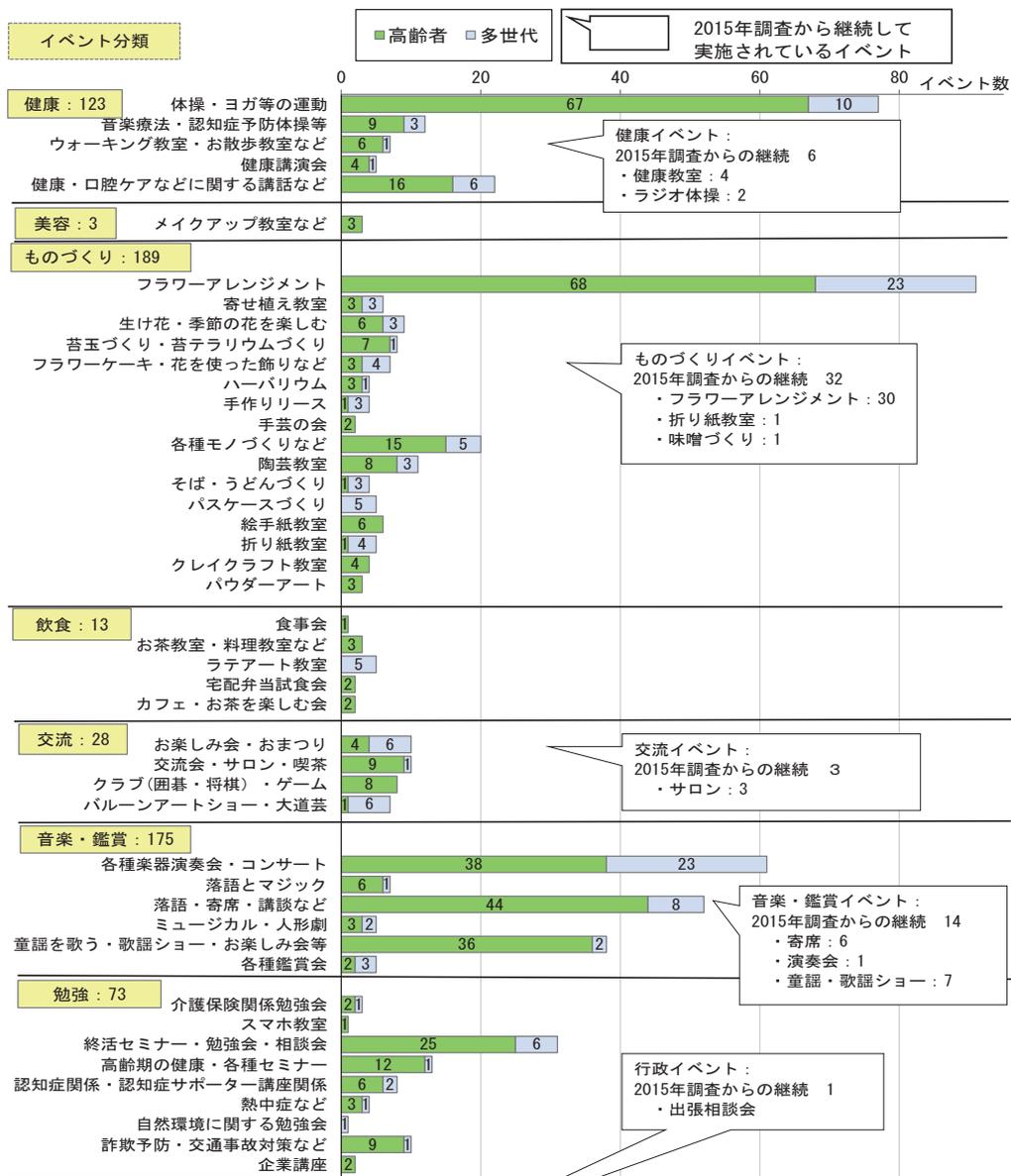


表4 イベント内容の詳細分類

内容分類	総計	定期的イベント			不定期イベント		
		高齢者向け	多世代向け	合計	高齢者向け	多世代向け	合計
健康	123	41	9	50	61	12	73
美容	3	0	0	0	3	0	3
ものづくり	189	27	7	34	104	51	155
飲食	13	4	0	4	4	5	9
交流	28	17	4	21	4	3	7
音楽・鑑賞	175	19	5	24	111	40	151
勉強	73	3	1	4	57	12	69
防犯・防災	12	1	0	1	11	0	11
行政	3	3	0	3	0	0	0
複合	44	6	3	9	24	11	35
その他	5	3	0	3	1	1	2
合計	668	124	29	153	380	135	515

図3 イベント内容の詳細 (2020年調査 81団地668イベント)

みを対象としたイベントが 124 イベント(イベント全体の 18.6%)、多世代を対象としたイベントが 29 イベント(4.3%)であった。また、不定期開催は、515 イベントで、高齢者のみを対象としたイベントが 380 イベント(56.9%)、多世代を対象としたものが 135 イベント(20.2%)であった。全体では、高齢者のみの対象が 504 イベント(75.4%)、多世代対象は、164 イベント(24.6%)で、高齢者のみを対象としたイベントの方が多い状況であった。これは、対象者変更からまだ間もないことやコロナ禍での自粛が影響しているものと考えられる。実際の参加者状況については(図 4)、「高齢者の参加が増加した」が 27 人(26.0%)、「子どもとその母親の参加が増加した」が 12 人(11.5%)、「外国人の参加が増加した」3 人、「中学生の参加が増加した」2 人となっていた。最も多かったのは「その他」42 人(40.4%)で、その詳細内容では、「わからない」が多いものの、「枠が増えても高齢者が申し込む」「年齢制限をなくしても若い方の参加はほぼなし」「高齢者が多い団地なので、多世代と言っても高齢者の出席の方が多し」「高齢者が多い団地なので、多世代と言っても高齢者の出席の方が多し」など、実際には、高齢化率が高いこともあり、高齢者の参加が多いことが挙げられていた。一方で、わずかながら「世代交流が活発になったとはいえないが、世代の幅が広がったのは、少なからずプラス面はある」「若い世代の参加を今までの高齢者の方も喜ばれている気がする」など、今後期待する意見もあった。

イベント企画に関する印象として(図 5)は、「多世代が興味を持つテーマのため、イベント内容決定が難しい」と回答するアドバイザーが 61 人(58.7%)と半数を超えている。

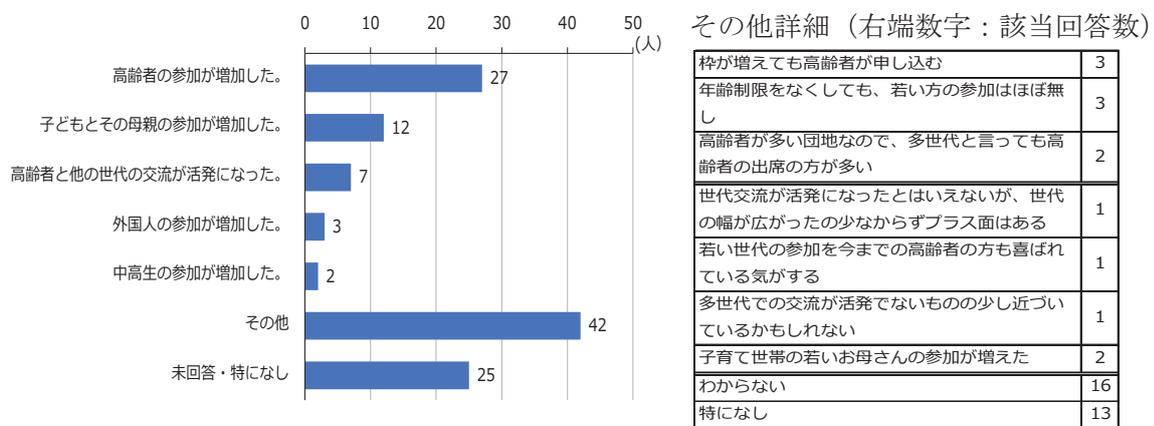


図 4 参加者の状況変化について (2020 年調査 n=104 複数回答)

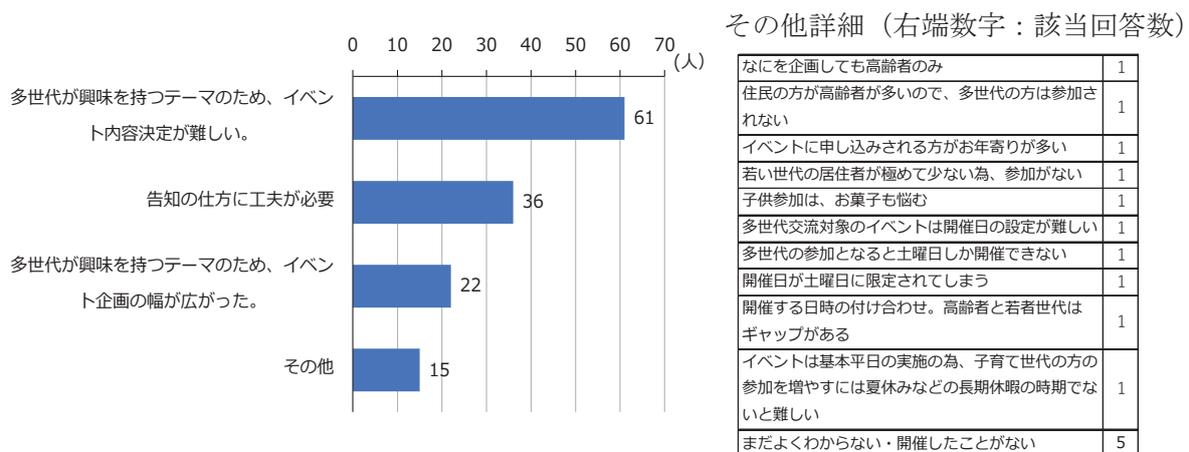


図5 イベント企画に関する印象 (2020年調査 n=104 複数回答)

逆に、「多世代が興味を持つテーマのため、イベント企画の幅が広がった」とする回答は22人(21.6%)であった。また、参加者を募るための「告知の仕方に工夫が必要」という回答も36人(34.6%)であった。「その他」では、高齢者の参加が多いという指摘に加えて、「多世代交流対象のイベントは開催日の設定が難しい」「多世代の参加となると土曜日しか開催できない」など、世代間の生活スタイルの違いなどの課題も指摘された。実際に多世代対象のイベントを企画しても、なかなか高齢者以外の若者世代や子育て世代、中年層の参加がなかった状況も確認できた。その理由として、アドバイザーがあげた内容としては、「そもそも団地の高齢化が著しく、若者が少ない」ことや、「若い世代、特に子育て世代は、子どもの習い事などがあり、時間がなかなか取れない」「高齢者以外の世代が、平日、仕事や学校があり、イベントの企画が土曜日などに限定されてしまい企画しにくい」「イベント内容の選択が難しい」などが指摘された。また、「これまで、アドバイザーが企画するイベントは高齢者対象のイベントとして認識されているため、アドバイザーが企画することで、初めから対象外だと思い込んでいる」など、参加を募ることに苦勞している状況がうかがえた。

多世代対象イベントが実施されている団地を見ると、継続率が高いフラワーアレンジメントが増加傾向であった。また、コンサートや演奏会などでも、多世代イベントとしても企画が比較的しやすい傾向がみられ、わずかではあるが、多世代が参加しやすいイベントもあることが確認できた。また、イベントの参加者は、総じて女性が多く男性の参加が少ないことも指摘された。もともとの居住者に女性が多い傾向はあるものの、参加者は女性が多い傾向があることがヒアリング調査で確認できた。また男性の参加者が多いイベントとしては、「落語」「寄席」などがあげられ、2015年調査時も同じ傾向が見られた。

こうしたイベントの開催にかかわる業務で、アドバイザーが負担に感じていることについて(図6)は、「企画内容の検討」が最も多く68人(65.4%)、次いで、「参加者への周知」が49人(47.1%)、「協力体制」が28人(26.9%)、「参加者の体調管理」が23人(22.1%)と続いている。多世代すべての人が参加しやすく、楽しめる内容とすることの難しさや参加者を募る告知の仕方など、イベント企画、実施業務では、アドバイザーが負担に感じる課題があるが、少しずつ多世代イベントも浸透しており、今後の企画・実施についても経過を見守る必要がある。

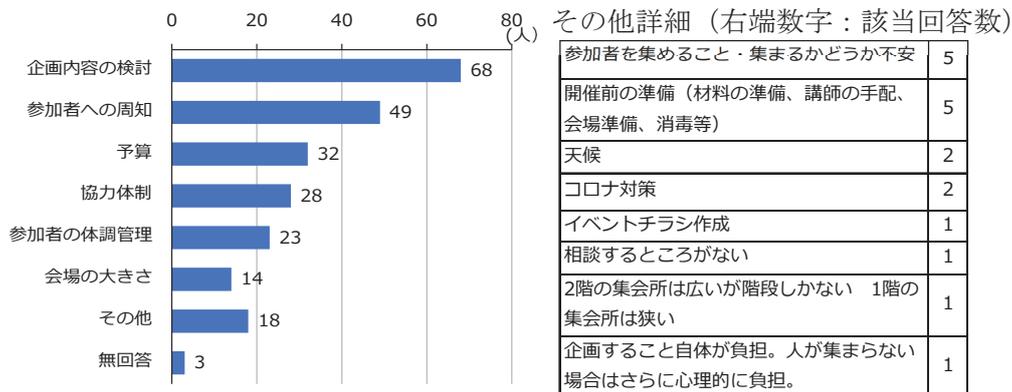


図6 イベント企画で負担に感じること (2020年調査 n=104 複数回答)

3.2. コロナ禍でのイベント開催業務

3.2.1. イベント開催業務への影響と感染対策への配慮

新型コロナウイルス感染症拡大に対する様々な対策が顕著となった2020年頃より、アドバイザーは、UR団地に入居する高齢者への感染症拡大防止に関する注意喚起や細かな感染対策を実施してきた。その具体的な対応やアドバイザー業務への現状は既報³⁾で報告した通りである。これまで、実施されていたイベントについては、中止や延期を余儀なくされたが、居住者からは、イベント再開の問い合わせやイベントが開催されないことで外出や他者との交流機会がなくなってしまったなどの声も寄せられ、イベントの開催が団地内の交流や外出の動機づけとなっており、参加者の楽しみにつながっていた状況も確認できた^{注6)}。そのため、アドバイザーは、居住者の問い合わせに対応する形で、感染リスクに配慮しつつ、外出のきっかけや居住者間の交流につながるイベントの検討を行っている状況が把握できた。調査2、調査3の結果を見ると、対象地域の差はあるものの、第1回の緊急事態宣言が発出された期間後の2020年9月以降に感染対策に配慮しながらイベント等を工夫して実施している団地が、23団地(82.1%)あった(表5)。その具体的な内容について見ると、①集会室で人数制限をしたうえで実施するイベント、②自宅での作業や体を動かすおうちイベント、③団地の屋外空間を利用したイベントの3つに分類できた。①集会室イベントは、これまで開催していたイベントと同様に集会室を利用するものであるが、換気や消毒を徹底した上で、人数制限を行うことで密を避ける配慮をしていた。②おうちイベントでは、自宅での作業を前提として、塗り絵や体操などを各自のペースで行えるようにレジメにまとめ、配布物として配布し、出来た作品等がある場合は提出してもらい、後日、集会室や団地内の人目に付く場所に展示することで、成果物を鑑賞できる様に配慮していた。イベントが集行的に行われなくても、配布物の受け取りや成果物の提出、景品の受け取りなどの目的をつくり、管理サービス事務所まで往復するという外出を促していた。さらに、管理サービス事務所、アドバイザーと顔を合わせることで、安否確認やご本人や近隣の情報収集にもつながっていることも確認できた。通常と形式を変えてのイベント実施では、同じ作品を制作する人との会話のきっかけになることや成果物を鑑賞することで個別に行った作業にも達成感を感じ、さらなる活動意欲に結びつく相乗効果も

あることがヒアリング調査で把握できた。これまで人気があり継続されてきたフラワーアレンジメントでは、団地 No1、5、15 の3つの団地でそれぞれ異なる方法で開催されていた。集会室イベントとして実施するケースと集合することを心配する高齢者には、集会室から使用材料等を持ち帰って自宅で作業する②おうちイベントするなど、それぞれが安心して状況に応じて参加できるよう、参加方法の選択肢を複数用意して配慮する状況が把握できた。

その他、特徴的な点として、団地屋外を利用した③屋外イベントがある。運動不足や引きこもりのストレスを溜める高齢者自らが、団地内のベンチスペースで距離を保ってお喋りする光景や団地内のウォーキングコースを、時間を選んで散歩する方々が増加した様子を観察することで、声掛けしたものや、屋外掲示板を利用したクイズラリーのイベントなど、アドバイザーがこれまでの見守りや巡回業務の中で、居住者の滞留が多いと感じていた団地内の屋外環境を利用した交流など、団地ごとの公園や広場、遊歩道などの環境や四季を通した自然環境を利用して、屋外で過ごしてもらうなどの配慮がみられた。これは、日常的に団地内で高齢者が多く集う場所を把握し、情報収集やさりげない安否確認、見守りを行ってきたアドバイザーだからこその視点と考えられる。

3.2.2. アドバイザーの団地環境の把握と利用

アドバイザーの業務では、イベント開催は集会室を利用するものが中心だが、コロナ禍での感染リスクへの対応と閉じこもり傾向の高齢者の生活改善の目的から、団地内の屋外環境を上手く利用した働きかけや、外出を促す工夫をするアドバイザーが把握できた。高齢者の滞留しやすい場所や見守りなどの観察がしやすい場所など、アドバイザーが居住者の生活特性と団地環境を把握し、その情報を業務に利用していると考えられたため、状況把握のために団地環境調査（調査3）を実施し、その結果について分析した。

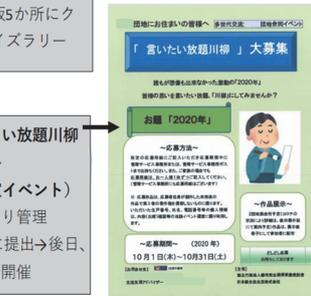
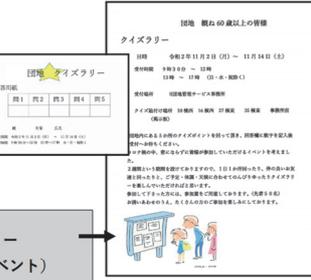
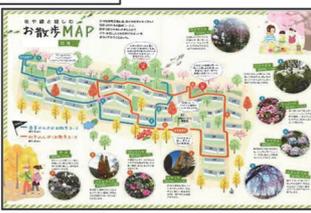
回答が得られた29団地の結果をもとに、高齢者やその他の団地居住者が滞留しやすい場所、外出しやすい場所について分類したところ、A：遊歩道やウォーキングコース、B：自然環境の豊かなエリア、C：ベンチスペース、D：公園（プレイロット等）、広場等、よく利用されている団地内施設周辺などに分類できた。A：遊歩道やウォーキングコース等は、団地居住者の健康促進のための散歩などの外出を促す目的で、歩行者専用歩きやすく整備されたものが多く、周辺に季節感を感じさせる豊かな自然環境が整備されていた。また、B：自然環境の豊かなエリアは、UR団地の特徴となる桜並木や銀杏など紅葉がみられる場所が指摘された（表6）。さらに、C：ベンチスペースは、団地内の様々な場所に配置されたベンチ周辺で、特に藤棚や団地自治会等で整備している共同花壇、スーパーや商店街周辺や管理サービス事務所の近くなど、多くの居住者の生活動線となっているルートや買い物や手続きなどの目的施設の周辺などに配置され、休憩などに利用しやすい配置となっていた（表7）。自治会などで管理されている花壇なども含めた団地内の豊かな自然は、四季を通して鑑賞でき、夏の木陰や冬の陽だまりなど、外出を誘発し、気分転換やリフレッシュに結びつく要素となって、団地居住者に効果的に利用されている状況が確認できた。さらに、D：公園や広場などは、団地内に整備された遊具や健康器具、グラウンド、プレイロットなど、あらかじめスポーツや集会活動などを実施するために整備された設備類も多く、目的に応じて使い分けがされていることが分かった。

表 5 感染症対策を考慮したイベントの様子

	集会室イベント	おうちイベント	屋外イベント
感染リスク対策の工夫 団地 No	密を避けるために人数制限をして集会室で実施（集会室を受付や展示に利用して自宅で作業するイベントを含む）。	題材等を持ち帰って、各自のペースで自宅で作業し、完成品を管理サービス事務所へ提出。提出物を掲示板や集会室に展示して、都合のよい時間に鑑賞できるように配慮。	密を避けるため、広く使える団地内の屋外広場、ベンチスペース、ウォーキングルート、遊歩道の利用を紹介し、散歩や安心できる距離をもって体を動かす体操等を実施。
1	●スマホ体験講座 ○樹木プレートづくり ●フルートコンサート ●フラワーアレンジメント	●体操の案内 ●手作りマスク+写真撮影 *マスキューズづくり ●フラワーアレンジメント	NO.1: フラワーアレンジメント (集会室イベント+おうちイベント) 人数制限して集会室で製作する人と自宅に持ち帰って製作する人とに分けて実施
2		●体操の案内 ●手作りマスク+写真撮影	
3	●落語会&茶話会 ●フラワーアレンジメント ◎毛糸アートで絵づくり ◎アートツリーづくり		NO.5: フラワーアレンジメント (集会室イベント) 人数制限して集会室で実施
5	○フラワーケーキ作り ●ラクラク体操 ●フラワーアレンジメント		NO.15: フラワーアレンジメント (おうちイベント) 材料を自宅へ配布し、その日に製作。アドバイザーが家庭訪問して出来上がった作品の写真撮影
6	●新聞ちぎり絵教室 ○クリスマスリースづくり ●フラワーアレンジメント	●手作りマスク+写真撮影	
7	●フラワーアレンジメント		●散歩コースの紹介
8	●健康・暮らしの相談室	○シールちぎり絵づくり	
9	●川柳展示会	●川柳	●遊歩道の紹介
11		●体操の案内 ●フラワーアレンジメント	●クリスマスツリーの飾りつけ
15	団地にお住まいの方参加無料 団地第39回交流イベント 二胡コンサート	●脳トレ、間違え探し、脳トレ、クイズの配布 ●手作りマスク+写真撮影	NO.9: 遊歩道の紹介 (屋外イベント) 散歩ができる四季の自然を感じさせる遊歩道の紹介
16	●塗り絵配布 ●手作りマスク+写真撮影	●塗り絵配布 ●手作りマスク+写真撮影	
17	●体操の案内 ●食生活の記録表 *折り紙教室	●体操の案内 ●食生活の記録表 *折り紙教室	○ラジオ体操 ○クリスマスイルミネーション 点灯セレモニー (自治会) ●春の花壇植え替え作業 ●団地内植物、遊歩道の紹介
18	NO.33: 二胡コンサート (集会室イベント)		
19	集会室で感染対策をして実施	●脳トレ、間違え探し、脳トレ、クイズの配布 ●体操の案内	NO.25: クイズラリー (屋外イベント) 団地内の屋外掲示板5か所にクイズを掲示したクイズラリー
20			
21			
22	●終活セミナー	●塗り絵配布	
23	●グリーンアレンジメント		
25			●クイズラリー
26	○言いたい放題川柳展示会	○言いたい放題川柳	
27	○言いたい放題川柳展示会	○言いたい放題川柳	
29			●遊歩道の案内
31		●手作りマスク+写真撮影	
33	○イキイキ笑いの広場 ○二胡コンサート	●手作りマスク+写真撮影	NO.26.27: 言いたい放題川柳 (おうちイベント+集会室イベント) 自宅で作った川柳を管理サービス事務所に提出→後日、集会室にて展示会開催

○多世代対象 ●高齢者対象
◎親子・小学生等、外国人等対象
*管理サービス事務所窓口で個別対応
→同一のイベント
太字: 掲示物を紹介している特徴的なイベント

<イベント掲示物・配布物の例>



調査 2.3 より感染症へのリスク管理をして 2020 年 9 月以降に実施された特徴的なイベント、集まりを取りまとめた一覧のため、実際に実施されているが調査時に取り上げられず、掲載されていない場合もある。

表6 団地内で高齢者が良くいる場所1 A: 遊歩道やウォーキングコース
(○: 該当回答あり) B: 自然環境の豊かなエリア

団地番号		1	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	15	16	17	18	19	21	22	25	27	31	32	33	
高齢者が 良くいる場所1	所在地	東京都江東区	東京都江東区	東京都板橋区	東京都足立区	東京都足立区	東京都東久留米市	東京都立川市	東京都町田市	東京都多摩市	千葉県千葉市	千葉県八千代市	神奈川県神奈川区	神奈川県藤沢市	神奈川県相模原市	神奈川県横浜市	埼玉県上尾市	埼玉県上尾市	埼玉県狭山市	三重県四日市市	愛知県名古屋市中区	福岡県福岡市	福岡県福岡市	福岡県北九州市	
	四季を感じる自然環境のある場所	遊歩道・散歩・ウォーキングコース	○				○		○								○		○		○	○		○	○
		小さな森・並木道(桜・紅葉など)	○	○	○	○		○		○	○	○	○			○		○		○				○	○
花壇のある場所	自治会・敬老会・有志等により管理された花壇		○	○	○				○					○	○	○				○		○		○	



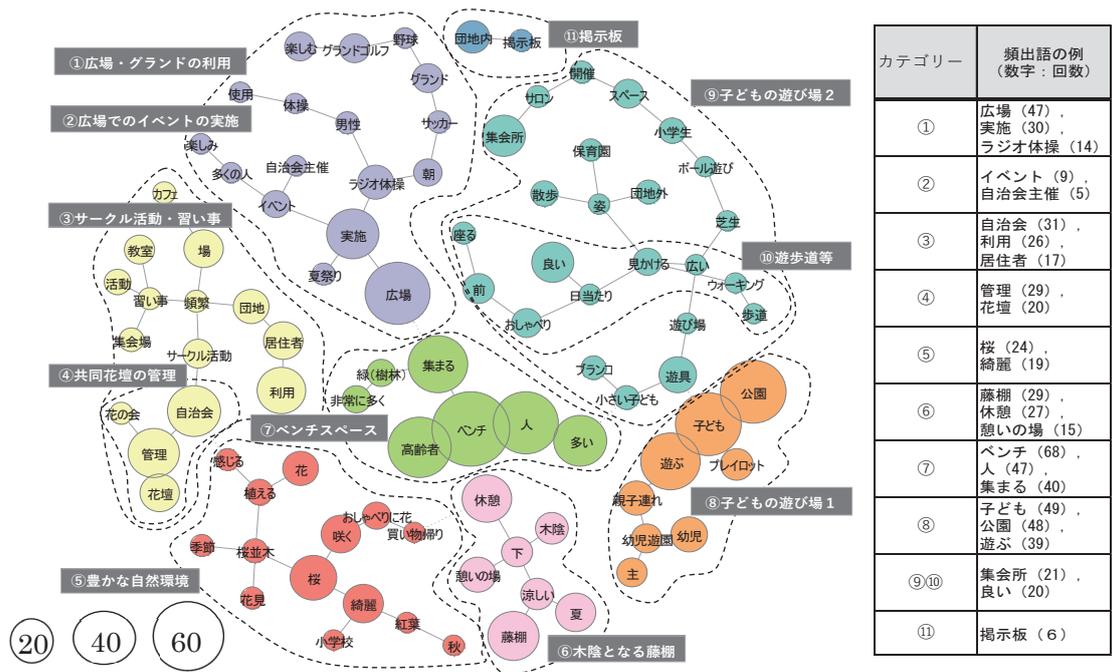
表7 団地内で高齢者が良くいる場所2 C: ベンチスペース (数字: 該当回答数)

団地番号		1	2	3	4	5	8	11	12	15	16	17	18	19	20	21	23	25	27	29	31	32	33	
高齢者が 良くいる場所2	所在地	東京都江東区	東京都江東区	東京都江東区	東京都板橋区	東京都足立区	東京都東久留米市	東京都多摩市	千葉県千葉市	神奈川県神奈川区	神奈川県藤沢市	神奈川県相模原市	神奈川県横浜市	埼玉県上尾市	埼玉県上尾市	埼玉県上尾市	埼玉県狭山市	三重県四日市市	愛知県名古屋市中区	大阪府高槻市	福岡県福岡市	福岡県福岡市	福岡県北九州市	
	ベンチスペース	スーパー・商店街付近			1	1								1	1	1		1			1			
公園内・広場内						2	1	1	1	1	2		4	2		1	1							
管理サービス事務所近く						1				1										1				
団地内通路						2					1	1	1	2					1				1	
駐車場付近・バス停周辺						1										1								1
木々の木陰・花壇等周辺														1									1	
藤棚下		1	1		1	1						1										11		1



さらに、回答が得られた 29 団地のうち、住棟配置図への自由記述として、抽出できた 424 テキストについて分析した。総抽出語数 6412 語、異なり語数 893 語であった。出現回数が最も多いのは、「ベンチ」(68 回) で、次いで「子ども」(49 回)、「公園」(48 回)、「広場」(47 回) であった。共起ネットワークで出現回数が多い語を含むサブグラフを見ると、11 カテゴリーに分類することができた(図 7)。最多頻出語の「ベンチ」に関する、自由記述回答例では、「日当たりの良いベンチで高齢者の方が腰をおろしている」

「藤棚下は、夏涼しく冬日当たりが良いのでベンチで休んでいる。」「花壇に沿って長いベンチがあり、憩いの場になっている。」など、④⑤⑥の категорияと関連する記述がみられた。特徴として、藤棚の下、木陰の「ベンチ」は、夏に涼しい場所となり、休憩や憩いの場として重要な役割を担っていることが把握できた。また、団地内には自治会、敬老会が管理する花壇が整備されているところも多く、緑（樹林）が非常に多い環境や紅葉や桜が綺麗な場所、花が植えられた場所など、季節感や四季を感じる豊かな自然環境が人々の滞留を生む要因となっているといえる。また、①⑧⑨では、団地内に整備された公園や広場、プレイロットなど、高齢者がラジオ体操やグランドゴルフをするだけでなく、子どもや親子連れ、小中学生の遊び場にもなっており、遊具や砂場、グランドなどが整備された環境があることで、多世代が利用していることが確認できた。さらに、自由回答には、「朝のラジオ体操」、「午前中のグランドゴルフの利用」、「午後は、学校帰りの子供たちが遊具で遊ぶ」など、アドバイザーが、団地施設利用者のおおよその生活行動パターンを把握していることも確認できた。アドバイザーは、主に高齢者の窓口対応を業務としているが、団地内の各種施設を利用する多世代の状況や、人の動きを広く把握し、業務に生かしていると考えられる。



カテゴリー	自由記述解答例
①広場・グランドの利用	店舗前の広場では、高齢者（女性）が毎日あつまっておしゃべりしている。広場は、高齢者がグランドゴルフを実施している。
②広場でのイベント実施	自治会主催で実施する夏祭りのイベント広場がある。集会所は、自治会のサロンを実施。
③サークル活動・習い事	自治会活動の場所として頻りに利用されている。管理サービス事務所は、多数の団地居住者が来て出入りが絶えない。
④共同花壇の管理	自治会が季節ごとに花を植えて下さり、季節感を感じ、花で癒される。
⑤豊かな自然環境	春は桜、初夏は新緑、秋は紅葉が綺麗。通路が平坦で、四季折々の花などで景色が綺麗。
⑥木陰となる藤棚	藤棚下は、夏涼しく冬日当たりが良いのでベンチで休んでいる。バス停前の藤棚は、毎日のように人が集まっている。
⑦ベンチスペース	ベンチ、緑（樹林）が非常に多くあり、よく人が集まっている。買い物帰りなどに立ち話や休憩をしている。
⑧子どもの遊び場 ⑩遊歩道等	小さな子どもが安心して遊べる公園となっている。公園は、親子連れが良く遊んでいる。
⑨子どもの遊び場 ⑩遊歩道等	集会所は自治会のサロンを実施。遊歩道は、ジョギングやウォーキングをしている高齢者が多い。
⑪掲示板	情報が目に留まる掲示板がある。

*⑨⑩は同一カテゴリーの中で細分化した。

図7 団地環境に関する共起ネットワークとカテゴリー分類

4. 総合考察

本研究では、UR 賃貸住宅に配置されたアドバイザーの業務のうち、地域コミュニティ形成のサポートとして実施されているイベントの企画・開催等の業務に着目し、2015年調査と2020年調査の結果を比較して、その企画内容の実態を明らかにした。全体としては「不定期」の開催イベントが多く、「ものづくり」「音楽・鑑賞」等の内容が多く企画されている状況がわかった。また、イベントの対象を高齢者だけでなく、多世代とする際、集客しやすい複数のテーマを組み合わせる工夫がされていることが分かった。また、イベント開催は、高齢者の外出や交流の機会として期待されていることから、コロナ禍での感染リスクに配慮したイベント開催の工夫等、これからの地域コミュニティ形成のサポート業務に生かせる特徴と課題を抽出できた。その主な点は以下になる。

① 今後に向けた多世代対象イベントの工夫

イベントの対象や企画については、現状ではまだ、高齢者対象の企画が多いが、多世代対象のイベントの増加が期待される。今後は、テーマや内容設定の工夫が必要であること、また、学校や仕事などで生活サイクルの違う世代でも参加できる日時の設定の工夫も必要と言える。また、アドバイザーが企画するイベントは、継続して実施することに加え、「高齢者を対象としたもの」というイメージを払拭できる告知方法の検討も必要である。現状では、多世代対象のイベント開催の成果まで具体的に把握できてはいないが、今後のさらなる高齢化に向けて、多世代の居住者が相互に交流することで互助意識が生まれ、日常生活でのかかわりの機会を醸成することが重要といえる。また、外国人や子育て世帯が多い一部の団地では、対象を限定したイベントを企画していることから、団地ごとの居住者の特性を把握した企画の工夫、定着が期待される。

② 外出や交流機会を増加させる新たなイベント形態の工夫と団地環境の利用

コロナ禍での感染対策を踏まえて、これまでの集会室での実施にこだわらない、新しい形式でのイベントの工夫がアドバイザーごとに検討されていた。同じ内容のイベントでも、密に配慮して集会室で実施する、おうちイベントとする、屋外イベントすることで、参加の選択肢を複数用意することになっていた。それによって、感染症対策はもちろんのこと、これまで大人数での集会的なイベント参加を好まなかった方や自身のペースで作業したい方にも参加の機会を作ることとなり、今後のイベント企画の可能性が広がるものと期待できる。また、団地屋外に、自然環境や花壇、遊歩道、ベンチスペースなどが整備され、それらが、入居者の健康づくりや気分転換、他者との交流等に結びつく重要な滞留場所となっていることをアドバイザーが細かく把握していることで、その情報を生かした屋外イベントが新しいイベント形態として企画されていることが確認できた。高齢者の生活状況と団地環境の把握は、日常的な高齢者の見守りや巡回など、アドバイザーの日常業務に生かされているとともに、今後、屋外でのイベント等に結び付けて、利用することで地域コミュニティ形成に生かせると考えられる。特に、広場やグラウンド、プレイロットなど、団地内では、子どもや中高年世代など、多世代に利用されている場所が多くあり、自然な形で多世代の存在を感じて交流できる環境があることをアドバイザーが把握していることから、集会室のイベントに限定せず、団地環境の特性を利用した多世代対象のイベント企画へと展開していくことも期待される。

アドバイザーは、団地に居住する高齢者の日常的な見守りを行うために、団地環境とそれを利用する団地内の多世代の生活状況を丁寧に観察し、多様な情報を収集して業務にあたっていることが明らかとなった。そのことが、日々の地域コミュニティ形成業務としてのイベント企画、開催に活かされているだけでなく、コロナ禍という特殊な状況下でも、高齢者の外出と交流に結びつく新しい形式のイベント開催への展開を実現させ、今後、さらなる工夫が期待される。特に、団地環境では、広場やグラウンド、ベンチスペースや自然環境など、居住者の様子を把握できる重要な場所等のカテゴリー分類も抽出することができた。また、世代別に利用や滞留がみられる場所や商店などの施設利用に伴う団地内の生活動線など、人々が利用しやすく、集いやすい場所とそれらの行為を誘発する要因についても絞り込むことができた。これらの環境要因は、団地の立地や規模、住棟の配置状況等による違いも見込まれるものの、居住者のライフスタイルに合った利用がされ、外出や交流を促す重要な要因となっていることを踏まえ、UR 賃貸住宅のみならず、地域の財産として今後、さらに活用していくことが期待される。アドバイザーは、高齢者を業務対象としつつも、高齢者の見守りを通して、団地居住者の状況と、団地での暮らしの特性を把握している。高齢化が進行する中でも、多世代が暮らす団地の特性を生かした見守りの工夫や交流の仕掛けを作り出す役割を今後も担っていくことが期待される。

謝辞

本研究は、株式会社 UR コミュニティ、日本総合住生活株式会社より日本女子大学家政学部住居学科定行研究室が委託を受けて行った『UR 賃貸住宅における生活支援アドバイザーに関する調査』の一部をまとめたものである。調査にあたり、ご協力くださった UR 賃貸住宅の生活支援アドバイザーの皆さんにお礼申し上げます。また、調査及び分析にあたり、日本女子大学家政学部住居学科定行まり子教授の指導をいただきました。記して、感謝の意を表します。

注

- 1 ゆあ〜メイトは、UR の窓口対応業務全般を扱う人材であり、管理主任は、巡回により管理業務を掌握している。主な業務として、賃貸人である UR からの情報伝達、提出書類の受領、集会所の利用などを実施している。
- 2 地域医療福祉拠点化は、高齢者や子育て世帯など、多様な世代をつなげる《ミクストコミュニティ》を目指した取り組みで、地域に不足している在宅医療福祉施設等を団地内に誘致し、地域医療福祉拠点を形成することで、UR 賃貸住宅の居住者だけでなく、周辺地域へも医療や介護サービスを提供する体制を目指すものである。
- 3 2015 年調査は、調査 1、調査 2 と同様に、UR 団地に配置された生活支援アドバイザーの業務の実態を把握し、業務上の課題を抽出する目的で、日本女子大学家政学部住居学科定行研究室が日本総合住生活株式会社の委託を受けて行った調査で、その結果詳細については、『UR 賃貸住宅における生活支援アドバイザーの窓口業務のある方に関する調査結果について（調査研究 I）』2016 年にまとめられている。なお、調査

- 1(2020年調査)のアンケート内容は、このアンケート調査項目に準じる形とし、経年変化についても把握できるように配慮した。
- 4 KH Coder3を用いた共起ネットワーク分析は、回答が得られた28団地に関する団地環境の書き込みについて、書き込みごとに1行に入力して1つのテキストとして整理して計量テキスト分析を実施した。標記の揺れとして、「お年寄り」「老人」を「高齢者」に、「子供」「こども」を「子ども」に統一するなど、同一の意味で表現が異なるものについては、統一して置換した。
 - 5 2015年調査で対象としたのは、33団地、アドバイザーは30人であった。内訳は、1団地に1人のアドバイザーが勤務する体制が基本であるが、管理戸数などの関係から、3団地を1人で担当するケースが1件、団地を2人で担当する件数が1件含まれている。複数団地でもイベント企画は1人のアドバイザーが行うこと、2人体制の団地では、イベント企画は2人で行うことを考慮して1団地に対するイベント企画状況について30団地を母数として分析した。
 - 6 既報(文献3)では、緊急事態宣言下でのアドバイザー業務で、接触に対する不安があることやコミュニケーションをとりづらく、状況把握が困難になっている実態を把握した。さらに、長期間の自粛生活下で、個人差はあるものの、総じて外出を自粛し、引きこもりがちとなることで外出が減少し、運動不足や他者とのコミュニケーションが極端に減少し、食欲不振や気持ちの落ち込み、体調不良が生じ、さらなる引きこもりとなるといった生活の悪循環が深刻化する状況を明らかにした。イベントに関しては再開を期待する問い合わせなどもあり(既報p51表14)、イベントが参加者の外出や交流に重要な役割をはたしていることが確認できた。

文献

- 1) 大塚順子,定行まり子(2019)『UR賃貸住宅における生活支援アドバイザーに関する研究』日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科第25号, p143-153
- 2) 大塚順子,定行まり子(2022)『コロナ禍でのUR賃貸住宅における高齢者の状況変化と生活支援アドバイザーの見守りの工夫』日本家政学会第74回大会研究発表要旨集, p88
- 3) 大塚順子(2022)『UR賃貸住宅における生活支援アドバイザー業務に関する研究—コロナ禍における高齢者対応と見守りの工夫について—』東京通信大学紀要第5号, p39-56
- 4) 大塚順子,定行まり子(2023)『UR賃貸住宅における生活支援アドバイザーの地域コミュニティ形成業務に関する研究』日本家政学会第75回大会研究発表要旨集 p93
- 5) 長江麻衣子,三輪康一,栗山尚子(2010)『住宅団地の外部空間がコミュニティ形成に及ぼす影響に関する研究—HAT神戸灘の浜・南芦屋浜団地におけるストリートファニチュアの利用実態を通して—』平成22年度日本建築学会近畿支部研究発表会, p425-428
- 6) 室田昌子(2014)『集合住宅団地の高齢者の孤立化に対する住民連携型ネットワークと住民意識の変化—横浜市勝田団地を対象として—』日本建築学会計画系論文集 第79巻 第702号 p1769-1775
- 7) 大塚順子,定行まり子(2017)『高齢者の外出および交流を促すイベント企画について—UR賃貸住宅における生活支援アドバイザーに関する研究(その2)—』日本建築学

会大会学術講演梗概集（中国）, p 1267-1268

- 8) 大塚順子, 定行まり子 (2010) 『シルバーピア住宅における団らん室の有効活用に関する研究』日本建築学会計画系論文集 第 75 巻 第 658 号, 2781-2788,
- 9) 李潤貞, 西野亜希子, 大月敏雄, 西出和彦(2016) 『集合住宅団地内の公共空間における住民の居場所形成についてーベンチ設置実験からみたベンチの働き方-』日本建築学会大会学術梗概集（九州）, 463-464
- 10) 水野優子 (2011) 『公的住宅団地における共用空間の居住者運営に関する研究』都市住宅学 75 号, p 120-125

大塚 順子（おおつか じゅんこ）東京通信大学 人間福祉学部 准教授